

## 論文無断使用問題に関する告示

東京大学大学院人文社会系研究科日本語日本文学専門分野に、2003年12月に提出され、2004年3月に修士の学位を授与された須永哲矢氏の修士論文『二重主語構文に関する研究』（未公開）の中の多くの部分が、朱鵬霄氏という中国人の大学教員によって、須永氏の研究成果であることを明示せず無断使用され、中国の研究雑誌、研究論文集に活字で公開された。

これをこのまま放置すれば、須永氏の学問上の権利が侵害されたままになるだけでなく、その内容が、須永氏の研究成果としてでなく朱鵬霄氏の研究成果として中国国内に定着し、かつ今後、中国・日本を含む全世界の日本語研究者の間に広がってしまうことになる。そのような事態に立ち至ることを避けるために、この事実を本誌面で公表することにした。

須永哲矢氏の修士論文の内容を無断使用した朱鵬霄氏の論文は、朱氏自身の後掲謝罪文にあるとおり、5篇である。無断使用の事実は、現在、朱氏自身も認めて反省しているとのことである。この5篇の論文は、その課題設定においても、主張内容の中心的論点においても、ほぼすべて須永氏の修士論文の内容をそのまま使用しており、それは朱氏自身の謝罪文の「別紙」（無断使用の内容を論文ごとに詳しく記したのもの。本誌には掲載せず。）において、本人が認めているところである。

以下に2009年2月10日付けの朱氏の謝罪文を掲載するが、これは同氏の許諾を得て転載するものである。

---

東京大学大学院人文社会系研究科日本語日本文学専門分野 御中

このたび、自分の付記に示す5点の論文において、須永哲矢氏の「二重主語構文に関する研究」という題の修士論文の内容を断らずに使用してしまったことに対して深くお詫び申し上げます。無断で使用した内容の詳細については別紙にまとめて同封します。

このような行為がかつて受け入れてくださった尾上圭介教授および同じゼミの須永哲矢さんだけでなく、東京大学の名誉をも傷つけてしまったと深く反省しています。このた

びのことは通して、学術規範を守るのが研究の第一歩で、研究者としての命だと認識できるようにになっています。今後は心を清めて研究に励み、このようなことが一切ありませんように、誠心誠意努力していくと誓います。

朱明貴

2009年2月10日

付記

- (1) 「日语双重主语句特性分析（日本語訳：二重主語構文の特性について）」『日语学习与研究』第2期 对外经济贸易大学《日语学习与研究》杂志社2006年6月 PP6-10
- (2) 「存在词作谓语的日语双重主语句成句条件（日本語訳：存在詞を述語とする二重主語文の成立条件）」『解放军外国语学院学报』第5期 解放军外国语学院《解放军外国语学院学报》编辑部2006年9月 PP25-28
- (3) 「情意形容词作谓语的日汉双重主语的对比研究（日本語訳：情意形容詞を述語とする日本語と中国語の二重主語文の対照研究）」『日语学习与研究』第2期 对外经济贸易大学《日语学习与研究》杂志社2007年4月 PP17-21
- (4) 「情意形容词作谓语的日语双重主语句一以“好き”“嫌い”为中心一（日本語訳：情意形容詞を述語とする二重主語文について一「好き」「嫌い」を中心に）」『日本学研究17』学苑出版社2007年10月 PP113-118
- (5) 「日本語と中国語の情意形容詞に関する一考察——二重主語構文の考察を通して」『日本语言文化研究第8辑』学苑出版社2008年5月 PP193-201

この間の経緯について、若干の説明を加える。

朱鵬霄氏は、2004年4月から同年12月初旬までの間、当専門分野に研究生として在籍（北京日本学研究中心博士課程学生として本学当研究科に訪日研修）した。その間、当専門分野博士課程学生であった須永哲矢氏が、留学生の勉学上の支援をするチューターとして、朱氏を援助し、自身の未公刊修士論文のコピーを貸与したとのことである。朱氏は中国に帰国後、この内容を多く使って（北京日本学研究中心に提出する）博士論文を作成し、その後、上記の活字論文を公刊したものである。本学研究生としての在籍期間に朱氏の指導教官であった尾上は、朱氏の博士論文提出、審査が終わったあと、2005年7月に同博士論文のコピーを入手（尾上の請求によって朱氏が送付）し、無断使用が多くあることを発見、朱氏に対して、同年8月と9月に注意を促す文書を送った。2006年5月にも尾上は朱氏と面談し、博士論文の中での先行研究無断使用問題を注意し、須永氏の研究成果を自己の研究成果であるかのように書いた論文を活字で公表することのないよう、きびしく注意を与えた。それにもかかわらず、朱氏は2006年6月から2008年5月の間に上記5篇の活字論文を公刊したものである。当専門分野としてはこれをそのまま放置することはできず、前記5篇中3篇の刊行を把握した時点、2007年11月に朱氏に抗議し、雑誌掲載の撤回、（さかのぼっての）削除を自ら雑誌に申し出るよう要請したが、1年半待っても、結局その措置は取られなかった。

ここに、やむを得ず、冒頭に記した観点から、この問題を公表することにしたものである。

2010年2月20日

東京大学大学院人文社会系研究科  
日本語日本文学専門分野  
主任（国語学）尾上圭介  
（国文学）長島弘明